

38. さて、彼らが旅を続けているうち、
イエスがある村にはいられると、
マルタという女が喜んで家にお迎えした。
39. 彼女にマリヤという妹がいたが、
主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。
40. ところが、マルタは、いろいろともてなしのために気が落ち着かず、みもとに来て言った。
「主よ。
妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。
私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」
41. 主は答えて言われた。
「マルタ、マルタ。
あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。
42. しかし、どうしても必要なことはわずかです。
いや、一つだけです。
マリヤはその良いほうを選んだのです。
彼女からそれを取り上げてはいけません。」

説教

今日は、奉仕ということについて、聖書から共に学びたいと思います。

38. さて、彼らが旅を続けているうち、
イエスがある村にはいられると、
マルタという女が喜んで家にお迎えした。

イエスさまは、エルサレムから東へ約3kmの所にあるベタニヤに來られました。すると、そこにマルタという女性がいて、イエスさまを家にお招きします。マルタはイエスさまをもてなすために忙しくしておりました。すると、そこにマリヤという妹がいました。彼女はイエスさまの足もとに座って、じいっとみことばに聞き入っていました。

39. 彼女にマリヤという妹がいたが、
主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。

これは師の教えを受ける際の弟子の姿でもありました。この妹マリヤは、イエスさまをもてなそうと懸命に準備している姉マルタをよそ目に、本当に全く何もせず、ただイエスさまのお話にじいっとひたすら聞き入っておりました。

「御馳走」という言葉は「奔走」という意味です。人を歓迎してもてなすためにあちらこちらと東奔西走する姿をうまく表現しています。おそらくこの時のマルタも、イエスさまを心から歓迎してもてなすために、買い出しに出かけたり、あるいは狭い家の中をあちこち行ったり来たり走り回りながら、家の掃除をし、寝床を整え、おいしい食事を準備していたことでしょう。イエスさまとその弟子たちは全部で少なく見積もっても13人はいることになります。私が別にここで敢えて強調しなくても、主婦のみなさんは身に染みてよくご存じのことと思いますが、誰をもてなすにせよ、それだけ多くの客をもてなすためには、どれほど神経をすり減らし、どれほど大変な犠牲を払わなければならないことでしょうか。

しかも、彼女はイエスさまをもてなすのです。それはそれは、マルタにとっては、それこそ一世一代の最高のもてなしをすることを考えたに違いありません。後に明らかになります、このマルタとマリヤの二人の姉妹は、決してケチ臭い人間ではありません。むしろ極めて気前の良い、実に献身的な姉妹たちです。ですからこの時、マルタは、おそらく間違いなく誠心誠意、まさに全力でイエスさまをもてなしたに違いありません。であればこそ、マルタは遂にキレてしまいます。そして、彼女のやり場のない怒りは、何もせずただイエスさまの話の聞いている妹マルタに向けられ、さらにはそれを黙って放置しているイエスさまにも向けられます。

40. ところが、マルタは、いろいろともてなしのために気が落ち着かず、みもとに来て言った。

「主よ。

妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。

私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」

「もてなし」とは、最も卑しい奴隷の身分になって「仕える・奉仕する」ことを意味します。「気が落ち着かず」とは「気が散る、取り乱す」ことを意味します。「おもてなしをさせている」の直訳は「仕えることを放置している(去る、見捨てる、置き去りにする、捨てる、後回しにする)」です。「手伝いをする」は「(誰かのことを)把握する、問題を取り上げる、(一般には)手伝う、援助する、助ける」「何ともお思いにならないのでしょうか」は「心配しておられない」です。

つまり、ここでマルタは、自分だけこうして懸命にイエスさまをもてなすため奴隷労働に励んでいるのに、妹のマリヤがいわば自分を見捨てて何もしないでいることを非難すると同時に、それを見て見ぬふりして、マルタを心配してくれないイエスさまをも非難しているのです。つまり、ここでマルタは、妹マリヤが自分を見捨てていると同時に、イエスさままでもが自分を見捨てていることに怒りを燃やしているのです。わかりやすく言えば、「こんなに自分はイエスさまのために頑張っているのに、誰も自分のことをわかってくれない、自分のことを心配してくれない」ということになるのでしょうか。このような不満は、一生懸命に頑張る人ほど起きやすいのかも知れません。

これに対して、イエスさまは答えます。

41. 主は答えて言われた。

「マルタ、マルタ。

あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。

42. しかし、どうしても必要なことはわずかです。

いや、一つだけです。

マリヤはその良いほうを選んだのです。

彼女からそれを取り上げてはいけません。」

「マルタ、マルタ。

あなたは、多くのことに心かき乱されて思い煩っています。

しかし、必要なこと(欠け、窮乏、仕事、責任)は一つです。

マリヤはその良いほうを選んだのです。

それを取り上げ(切り落とし)てはいけません。」 (41,42 直訳)

このイエスさまのみことばによると、マルタは、自分には多くのなすべき奉仕があると焦り、心かき乱され、気が動転し、錯乱状態で、思い煩っておりました。しかし、イエスさまは「必要なことは一つだ」と言われます。別訳で訳し代えると、私たちの「必要、欠け、窮乏、仕事、必要とされている役割、責任」は一つだと言うのです。

それは何でしょうか。「主の足もとにすわって、みことばに聞き入る」ことです。それがイエスさまの目には「良い(正しい、善、尊い、立派な)こと」なのです。みことばを聞くことこそが、何より良いことであり、善なることであり、立派なことであり、最高の奉仕なのです。そして、マリヤはそちらを選択しました。

私たちも同じです。多くのなすべきことがありすぎて、マルタのように心かき乱されてはいないでしょうか。自分のため、家族のため、そして神さまのためにと、多くのことに心かき乱されてはいないでしょうか。でも、私たちがなすべきつとめは一つです。それはイエスさまのみことばを聞くことです。

そして、そこから信仰が始まります。奉仕が始まります。献金が始まります。伝道が始まります。本当の意味で主のために生きる人生が始まるのです。神のことばを聞くことなくして、伝道も、献金も、奉仕も、信仰もあり得ません。「信じます」と言っても、何を信じるのですか？奉仕すると言っても、何のために奉仕するのですか？何で奉仕するのですか？何を根拠に、何を目標に、何が目的で奉仕するのですか？伝道や献金も同じです。何のために伝道しますか？何のために献金しますか？みんなするから、やらないと後ろめたいから献金するのですか？教会員(メンバー)となるために払う「会費」なんですか？あるいは「お賽銭」のように、何か自分の願を掛けて、御利益を願って投げ入れるものなのではないでしょうか？もしも、そのような動機であるなら、私は奉仕も伝道も献金もしない方が良くと思います。なぜなら、それは正しいことではないからです。マルタのように、疲れます。混乱します。錯乱します。ストレスがたまります。そして、いつかキレて不満が爆発するのです。

それなら、何もせず、ただみことばをじいっと聞いているだけの方がずっと良いと思います。神さまに喜ばれます。神の栄光をあらわします。奉仕も献金も伝道も、それは神さまの恵みに対する感謝の表現でなければなりません。不平不満を抱きながらやっても、意味がありません。それは神さまのためにするものだからです。みなさんは、人から何かをもらう時、あるいは人から何かをしてもらう時、ぶつぶつ不平不満を言われながら、「本当はおまえのような奴には勿体ない、あげたくないけど、ほら、くれてやる」と言われてしてもらっても、果たしてそれで嬉しいでしょうか？喜んで、感謝してするのでなければ、それは神さまのための奉仕にも献金にも伝道にもならないのです。そして、私たちが喜んで、感謝するには、まず神さまのために何かをしたいと考えるより、まずはみことばをよく聞かなければなりません。聞いて、私たちが神さまに愛され、この世に造られ、生かされ、キリストのいのちと引換に生かされている事実を確認しなければなりません。ある教会では、礼拝することが最高の奉仕と考えて、本当に礼拝に出席する以外信徒は何もしないそうです。それで、牧師があれこれ雑用をするそうです。でも、それもやむを得ないかも知れません。信徒の内に神さまへの喜びと感謝が満ちるまではそれもいいでしょう。

マリヤは、生涯ただみことばを聞いて終わったのではありません。マリヤは、この時、よくイエスさまのみことばを聞いたおかげで、イエスさまにとって何が一番必要であるかをよく理解しました。そして、最後の夜、自分の全財産・全生涯とも言える、嫁入り道具の高価なナルドの香油を惜しみなく主に捧げました。心を尽くして神を愛し、人を愛する人生(10:25~37)は、みことばを聞くことから始まるのです。

みなさんが、まずはみことばを聞いて、ひたすらみことばを聞いて、徹頭徹尾みことばを聞いて、そこから新しく生まれ変わった者としての新しい人生を生きていかれるよう、心から祈ります。そして、神さまへの心からの喜びと感謝をもって、神と人とに仕える「良き」最高の人生を生きていかれるよう祈ります。